

## 【6年生からの取材】

6年生は国語の授業で桐光学園小学校のパンフレット作りに取り組んでいます。いくつかのグループが校長室にやってきて、学校のことについて質問をしていきました。私には開校当時のこと、開校からこれまでの学校の変化、校訓・学校行事などについての質問が多かったです。

その中に、「校訓の、意志・表現・感謝はどのようなときに身につけるのですか？」という質問がありました。校訓の3つの心は、日常の生活において空気のように自然に子どもたちを包んでいるものであり、特別に学ぶというようなことではないと考えるのですが、そのときに子どもたちが取り組んでいた音楽集会を例にあげて次のように話しました。

・・・この校訓に示されている3つの心は、どれも私たちが日々の生活の中で大切にしなければならないことです。音楽集会を例に上げてみると、詩の意味を十分に理解しながらそれを歌という形で表現するときによくのことを学ぶはずですが、そして、みんなで頑張ろうと決めたことに対して、自分が強い気持ちで取り組むことが必要ですが、途中で難しいと感じたり面倒だと感じたりしたときに、仲間たちと力を合わせることで自分の折れかかった気持ちを建て直すことができ、自分が多くの仲間を支えてもらっていることに感謝の気持ちを持つことができます。つまり、この活動一つの中には、校訓にある3つの心がいっぱい詰まっているのです。・・・

同様のことを音楽集会のあとで全校児童にも話しました。学校行事の大切さと、そこでたくさんのことを学んでほしいという願いが子どもたちに伝わってほしいと思っています。

## 【携帯・スマホ】

スマホやiphoneと言われる多機能端末が多くの人たちに使われ始めていて、機器の性能の向上とともに使う人のマナーがこれまで以上に問われています。これまでの携帯と言われた機器に比べるとその性能には大きな変化があるようです。子どもにそのような機器を持たせるかどうかを決めるのは保護者ですから、当然使い方についても保護者の管理下においてしっかりと指導されていると考えたいのですが、残念ながらそうではないと思われる子ども同士のトラブルがときどき私たちの耳に入ってきてしまいます。私たちの耳に入ってくることは実際に起きているトラブルの中のほんの一部でしょうから、ちょっと大袈裟な言い方をすると子どもたちの日々の生活はそのようなトラブルの中にあるとも考えられます。メール、ライン、フェイスブックなどを使ったネット上での交流と言えれば何かとても便利でよいもののように思えますが、子どもたちにとっては自分自身の心の安定を維持できないほどの情報が飛び込んでくる日々となっているのではないのでしょうか。

先日、神奈川の私立小学校の校長による情報交換会がありましたが、携帯やスマホなどの使用については毎回話題になります。その中に、最近子ども同士のトラブルだけでなく保護者間のトラブルの原因にもなっているという発言がありました。私はネット上ではメール以外での情報交換・交流の手段を知りませんのでよく分からないのですが、どうして子どもの世界だけでなく、保護者の世界にもトラブルが起きるのでしょうか。便利さだけを知り危険性を十分に認識できていないことが原因なのでしょう。ボタン一つで個人の情報や考えが世界に向かって発信される時代です。触れたらどうなるか分からないボタンを押してはいけないはずですが。

通学路、栗平、多摩センター、新百合ヶ丘などで下校指導を行っているとき、携帯やスマホを使いながら歩いている子どもを見かけて声をかけたという報告を先生方から受けます。声をかけると、「駅に着いたら電話するように言われているから」と正直に答える子どもたち。保護者の声かけ一つで子どもたちはルールを守れたり守れなくなったりします。もちろん子どもたちが使っているのは通話機能だけでなく、通信、ゲーム、カメラなどの他の機能もあるのでしょうか。緊急時しか使用しないというルールは守られなくてもいいのであればそのルール自体を考え直さなければなりません。その先には、無秩序に桐光学園小学校の子どもたちが通学路や駅構内、電車内でスマホを使いながら、メールをしながら、ゲームをしながら過ごす姿が想像できます。そうやってほしくないです。また、下校途中にその日に学校であったことをメールでやりとりする子もいると聞いたことがあります。そこにはどんな内容が書かれているのでしょうか。知るのが怖いです。

## 【考える機会を】

ある先生の日誌に、「〇〇くん(さん)は、自分でどうしたらいいのか分からなくなると、もうそこからどうしたらよいかを考えることができなくなるようです」というような内容のことが書いてありました。私はそれに対して「今そうだとすることは、今までそういうときに自分で考える時間を与えてもらえなかったということなのではないだろうか。今からでも、自分でどうしたらいいか(どうするべきか)を考えることができる子にしていけばいいのではないか」と返信しました。1年生なら6歳、6年生でも12歳です。大人になるまでにゆっくり身につければよいこともたくさんあります。手をさしのべて、その子が歩くべき方向に身体を向けてあげるのではなく、見守り、必要最小限の声をかけて、自分で歩くべき方向を向くことができるように考える時間を与えて行くことが大切であると考えます。